

勉誠社

B e n s e i s h a

刊行書籍一覽

2026

●
国文学

●
日本語

●
日本史

●
東洋文化・東洋史

●
仏教関連

●
美術・芸術

●
建築

●
民俗学

●
書誌学・本の本・図書館情報学
アーカイブズ学・総記

ご注文方法

● | 勉誠社 WEB でご注文

弊社ホームページ (<https://bensei.jp>) にアクセスのうえ、
手順に沿ってご注文ください。迅速・確実です！



● | 勉誠社に直接ご注文

メール・ファックス・お電話などで弊社営業部宛に直接ご連絡ください。
以降のお手続きをご案内いたします。

〒101-0061
東京都千代田区神田三崎町 2-18-4
電話=03-5215-9021
FAX=03-5215-9025
E-mail=info@bensei.jp

● | 書店様ご注文

ご懇意の書店にご用命ください。全国の書店でご注文・お取り寄せいただけます。
Amazon ほか、各種 EC サイトでもご購入いただけます。

新装版 書籍流通史料論序説

鈴木俊幸[著]

貸本屋や絵草紙屋、小間物屋等の営業文書や蔵書書目・看板・仕入れ印など、書籍流通の実態を伝える諸史料を「眼光表紙裏に徹する」博搜により再構築し、書籍文化史の動態を捉える。

※本書は2012年刊行の『書籍流通史料論 序説』の新装版です。

A5判並製・496頁・2025年10月刊行
978-4-585-32077-7・定価8800円(税込)

黎明期の活字出版

和装活版本から文学書肆春陽堂の成立

山田俊治[著]

一八八〇年代の日本は、江戸時代以来の整版印刷にかわり、活字を利用した活版印刷が広く展開していく時期であった。活字印刷でありながら和綴じで製本され、時には錦絵の表紙で飾られた和装活版本、俗文学の新たな媒体となったボール表紙本、合冊を前提としたこより綴じの逐次出版物など多様な書型が生み出され、また、法制度の制定、新興業者の参入などが重なり、時代は混沌の様相を呈していた——。この日本出版史における近代移行期に人びとはどのように対応していったのか。共隆社や春陽堂など同時に勃興展開した版元の刊行書籍や関連資料を博搜・蒐集し、多角的な読み解きにより活字印刷黎明期の出版文化の有り様を通史的に描き出す意欲作！
掲載図版約三五〇点！

A5判並製・320頁・2025年12月刊行
978-4-585-39051-0・定価6600円(税込)

勉誠社
新刊案内

国文学

日本酒を読み解く

歴史・文化・技術

畑有紀・芳澤元[編]

古来、人々の生活に根付いてきた「日本酒」。
日本酒は、神道や仏教をはじめとする信仰とどのように関わってきたのか。物語や小説といった文学ではどう描かれてきたのか。酒税制度の変遷や酒造業、また、杜氏集団や酒蔵で働く人々の組織は地域経済・社会でどのような役割を果たしてきたのか。さらには、酒をめぐる言葉や表現はどのような変遷をとげてきたのか。歴史学、文学、経済学、経営学など人文社会科学領域の諸分野からアプローチし、多層的な広がりをもつ日本酒の文化の在り方を体系的に捉える。

アジア遊学312・A5判並製・256頁・2025年12月刊行
978-4-585-32558-1・定価3300円(税込)

蔵書家・集書家・書誌学者

蔵書・研究とその時代

編集部[編]

「集書家」・「蔵書家」・「書誌学者」…
本に惹きつけられ、本をこよなく愛した彼らは、どのように書物を集め、どのようなコレクションを形成し、いかに調査したのか。国内・海外のさまざまな人物を取り上げ、書物に魅せられた彼らの、その苦勞や成果、そして知られざる逸話などを広く紹介する。

書物学33・B5判並製・120頁・2025年12月刊行
978-4-585-30733-4・定価2200円(税込)

歌謡と芸態

在原業平の表象

児玉絵里子 [著]

『伊勢物語』『源氏物語』などの物語、そして和歌は、若衆歌舞伎の衣裳や美術にどのように取り入れられたのか。そして、それらは琉球宮廷舞踊にどのような影響を与えたのか。描かれた若衆歌舞伎の絵画や、琉球紅型の衣裳に見える文芸表象とは、人々はそこに何を託し、何を伝えようとしたのか。従来各々の視点から言及されることの多かった「歌謡」——踊歌や詞章と、「芸態」——舞踊の所作・振り・型という、文献研究と身体的考察を、多数の絵画や文献から総合的に行った意欲作! 図版点数100点超!

四六判並製・304頁・2026年1月刊行
978-4-585-37023-9・定価4180円(税込)

梵漢和の中世

言語と論理の和歌史

岡崎真紀子 [著]

和歌とは一体いかなるものであるのか——
仏教の思想と文化が広まり、定着していった中世日本において、その問いの答えは、天竺・中国・日本の三国にわたる世界認識・言語意識のなかに求められていった。仏教に由来する言語表現や論理を、和歌はどのように受け容れたのか。その受容のなかで、和歌・和語をめぐる表現や思想はどのように深化・展開していったのか。和歌・連歌の表現、それをめぐる注釈や説話、さらには密教学、悉曇学、神道説の言説など、和歌にまつわる「ことば」への意識と葛藤を記した諸資料を通覧・分析し、これまで見落とされてきた「もう一つの和歌史」を描き出す画期的成果。

A5判上製・704頁・2026年2月刊行
978-4-585-39058-9・定価11000円(税込)

勉誠社
新刊案内
国文学

戒厳令下の台湾文学

本省籍知識人のアイデンティティと日本

工藤貴正 [編]

1945年の敗戦後、台湾では日本統治期からの居住者(本省人)と戦後に渡来した国民党側(外省人)との間で「省籍矛盾」が激化し、二・二八事件を経て長きにわたる戒厳令下へと至った。本考察では、この抑圧的な時代において、本省籍知識人が日本との関係を保持しつつ、いかに自己のアイデンティティを構築したかを検討する。日本語世代から中国語世代に至る三世代の作家の軌跡を辿り、日本文学の翻訳受容や言語教育の実態を分析することで、台湾社会における精神的交流の様相と「省籍矛盾」の深層を明らかにする。

アジア遊学314・A5判並製・304頁・2026年2月刊行
978-4-585-32560-4・定価3850円(税込)

日本宗教文化史の射程

吉原浩人 [監修] 鈴木英之・平沢卓也・崔鵬偉 [編]

日本の文学・歴史・美術にはさまざまな宗教の影響が見て取れる。絵画とテキストにはどのような関係性があるか。法会次第を記す講式、寺社の由来を示す縁起から、何が読み解けるのか。平安時代の思想・宗教・文学・歴史はいかに形成されてきたのか。
禅宗思想や中近世の神道説はどのように展開したのか。宗教文化史の視点から前近代の日本を問い直す画期的な一書。

A5判上製・448頁・2026年3月刊行
978-4-585-31027-3・定価9900円(税込)

新装版 貸本問屋と貸本文化

娯楽的書籍の出版・流通・受容

松永瑠成[著]

近世以降、日本国内での書籍の出版点数は年々増加し、それまで読書と縁のなかった層へも、次第に書籍が行き渡るようになっていった。しかし、当時の書籍はまだ高価であり、蔵書として代々引き継がれていくだけの価値を有する学問的な書籍以外、たとえば小説類をはじめとする娯楽的な読み物などを購入して読む人々はそう多くはなかった。そのような娯楽的な書籍の流通を担ったのが貸本屋である。近世から近代に営業をしていた貸本屋の実態、また、貸本屋向けの書籍を出版・蔵版し、それらを卸す機能を有した貸本問屋のあり方を、これまで顧みられることのなかった諸種の資料を駆使し、初めて解明。貸本問屋→貸本屋→読者という娯楽的書籍の出版・流通・受容の総体を明らかにする画期的成果。図書館必備の一冊！

※本書は『貸本問屋と貸本文化』(ISBN978-4-585-32063-0)の新装版です。

A5判並製・672頁・2026年4月刊行
978-4-585-32099-9・定価9350円(税込)

新装版 俊頼髓脳全注釈

家永香織・小野泰央・鹿野しのぶ・館野文昭・福田亮雄[著]

歌病・歌体・歌枕など初期歌論書における格式の集成は、言わば、古代歌論の総集であり、それに続く歌語釈は、現存最古の和歌注釈で、かつ『江談抄』とともに貴族説話の嚆矢でもある。定家本を底本にして顕昭本・略本系本を対校した本文に、先行資料および同時代歌論書などの文献を網羅した語釈を付す『俊頼髓脳』全注釈である。

※本書は『俊頼髓脳全注釈』(ISBN978-4-585-39025-1)の新装版です。

A5判並製・704頁・2026年4月刊行
978-4-585-39059-6・定価13200円(税込)

勉誠社
新刊案内

国文学

北条時広家集

注釈と研究

中川博夫[著]

鎌倉幕府第六代將軍宗尊親王の下で一芸堪能の屋番衆、近習の歌仙としてあった北条時広。冷泉家時雨亭文庫に蔵される時広の家集『故越前々時広哥』を底本とし、その全編を翻刻し、精緻に注釈。また、研究篇として、家集の成立を考証し、所収歌の様相を考察する論考を収載。鎌倉期関東歌壇の北条氏の数多の御家人歌人の中で、唯一現存する家集の存在意義を明らかにする画期的成果。

A5判並製・304頁・2026年5月刊行
978-4-585-39060-2・定価11000円(税込)

平安時代仮名文芸覚書

今西祐一郎[著]

『伊勢物語』『土佐日記』『蜻蛉日記』をはじめ、さまざまな平安時代の仮名文芸のことばや結構を、その時代の感性や認識を見渡す視点より検討。従来の解釈の刷新を促す新見を提示する待望の一冊。

A5判上製・352頁・2026年5月刊行
978-4-585-39063-3・定価11000円(税込)

訓点語と訓点資料

第一五五輯

訓点語学会 [編輯]

1954年の刊行以来、訓点資料、訓点語(漢文訓読語)をはじめ、文体史、音韻史、辞書史などに関する論文、資料紹介、解説文、索引など、これまでに約500編を公表、広く利用されている学術雑誌。年2回刊行。

●収録

カラー口絵=京都国立博物館蔵『梵字形音義』▼論文=京都国立博物館蔵『梵字形音義』——解題と影印(宇都宮啓吾)▼高知県安田八幡宮蔵『大般若波羅蜜多經』の訓点と注記(佐々木勇)▼漢字音の認定と字音仮名遣いをめぐって(石山裕慈)▼副詞「一向」の史の変遷と変化のメカニズム(姚堯)▼呉語系中国資料の日本語音写にみられる陰声韻と入声韻の転換(王竣磊)

訓点語と訓点資料155・B5判並製・178頁・2025年10月刊行
978-4-585-38101-3・定価4950円(税込)

動的視点からの 日本漢字音史研究

石山裕慈 [著]

日本漢字音とは、単なる経年変化の中で受動的に採用されたものではなく、何らかの使用意識の下で、当時いくつか存した選択肢の中から自覚的・無自覚的に選択された結果のものである。本書ではこの「動的」な一面に着目し、個々の資料に出現する漢字音を分析し、相互に比較・対照。当時、どのような音が選択され、背後にどのような論理・力学があったのかを探り、中世以降の日本漢字音、すなわち日本語の漢字の音読みの歴史的变化について考察する。

A5判上製・432頁・2025年10月刊行
978-4-585-38007-8・定価12100円(税込)

勉誠社
新刊案内
日本語

梵漢和の中世

言語と論理の和歌史

岡崎真紀子 [著]

和歌とは一体いかなるものであるのか——
仏教の思想と文化が広まり、定着していった中世日本において、その問いの答えは、天竺・中国・日本の三国にわたる世界認識・言語意識のなかに求められていった。仏教に由来する言語表現や論理を、和歌はどのように受け容れたのか。その受容のなかで、和歌・和語をめぐる表現や思想はどのように深化・展開していったのか。和歌・連歌の表現、それをめぐる注釈や説話、さらには密教学、悉曇学、神道説の言説など、和歌にまつわる「ことば」への意識と葛藤を記した諸資料を通覧・分析し、これまで見落とされてきた「もう一つの和歌史」を描き出す画期的成果。

A5判上製・704頁・2026年2月刊行
978-4-585-39058-9・定価11000円(税込)

字典・詞典の研究

藤本灯 [編] 阿辻哲次・池田証寿 [監修]

中国最初の漢字字典『説文解字』(西暦100年頃)から日本の『日本大辞書』(1892-1893年)まで、古今の辞書を対象に、系統研究から、成立論、字体史、音韻史、語彙史、受容史、データベース化まで、さまざまな角度からおこなわれてきた辞書研究を、日中韓の研究者が集い総合的に捉える初の試み。

A5判上製・472頁・2026年2月刊行
978-4-585-38008-5・定価11000円(税込)

論究日本近代語

第4集

日本近代語研究会【編】

広義の日本近代語における歴史と構造を、文字・表記、文法、語彙、表現、対照研究等の日本語学的観点から詳細に考究した、日本文学、日本史学、日本語教育学、表現論などの分野にも資する論文集。

A5判上製・528頁・2026年3月刊行
978-4-585-38524-0・定価19800円(税込)

訓点語と訓点資料

第一五六輯

訓点語学会【編輯】

1954年の刊行以来、訓点資料、訓点語(漢文訓読語)をはじめ、文体史、音韻史、辞書史などに関する論文、資料紹介、解説文、索引など、これまでに約500編を公表、広く利用されている学術雑誌。年2回刊行。

●収録

▼小特集キリシタン資料研究の現在＝「キリシタンと出版」拾遺(豊島正之)▼『ラポ日辞書』から『羅日辞書』へ(岸本恵実)▼定訓論再考(白井純)▼ロドリゲス『日本大文典』における日本側の語学知識について(山田昇平)▼キリシタン版『日葡辞書』の接続詞ouについて(中野遙)▼キリシタン版及びバレット写本に見える行間の書入れ線に就いて(黒川茉莉)▼論文執筆者＝宇都宮啓吾▼山本久▼手塚美希▼浅田健太郎

訓点語と訓点資料156・B5判並製・224頁・2026年3月刊行
978-4-585-38102-0・定価4950円(税込)

勉誠社
新刊案内
日本語

日本語と漢字音・漢語音

データベースが切り開く新しい世界

加藤大鶴・石山裕慈・佐々木勇【編】

漢字・漢語は、日本語を使う私たちの言語生活に欠かせないものだ。しかし、その漢字や漢語が日本語話者によってどのように読まれてきたのか、ということを実証的に明らかにしていくことは必ずしも容易ではない。1000年以上にわたる付き合いの中で、どのように漢字・漢語が発音され、定着ないし消滅していったのか——そのことを限られた資料や痕跡から明らかにしていくことが漢字音・漢語音研究の目標である。漢字音・漢語音研究の方法論や視角、他の学問領域との交差の在り方を紹介する第1部、そして近年開発・構築の進められている「資料横断的な漢字音・漢語音のデータベース(DHSJR)」の狙いや意義、また、それを利用した新たな研究の展開を提示する第2部・第3部より構成。新たな漢字音・漢語音研究の魅力と面白さを伝える貴重な一冊。

アジア遊学320・A5判並製・240頁・2026年6月刊行
978-4-585-32566-6・定価3300円(税込)

會澤正志齋と 水戸学の国体論

藤野博[著]

明治維新の思想的原動力となり、近代国家建設の基軸となった国体論。その思想はどのように始まり、社会に浸透したのか。また人々にどのような影響を与えたのか。水戸学における国体論の大成者である會澤正志齋(あいざわ・せいし)に光を当て、その生涯や思想に迫るとともに、主著『新論』が西郷隆盛・大久保利通・木戸孝允といった幕末の志士たちに与えた影響を明らかにする。また、国体論の思想的限界についても触れる一方、現代においてもその理念が生きていることを提示するなど、多角的な視点から国体論の歴史的意義を解明する。

四六判並製・200頁・2025年8月刊行
978-4-585-32073-9・定価3300円(税込)

文化財を未来につなぐ 博物館と学芸員の仕事

学芸員をめざす人へ

高木徳郎[編著]

基礎知識や法制度から、企画・展示、作品の収集や保存・修理、調査研究など多岐にわたる博物館活動の現状と課題、具体的な仕事のノウハウまでを平易に解説。学芸員の実体験やエピソードのほか、地域の文化財を未来につなぐための博物館の活動の実例を豊富に収録し、これからの博物館のあるべき姿や学芸員にとって最も大事なことを学べる入門書。学芸員志望の学生をはじめ、自治体職員として文化財保護や観光・地域振興政策の立案・推進に携わっている人、博物館のファンやサポーターとして博物館を支えている人、博物館のファンやサポーターとして博物館を支えている人に必備の一冊。

A5判並製・352頁・2025年11月刊行
978-4-585-30022-9・定価3080円(税込)

勉誠社
新刊案内
日本史

増補改訂版 鷹狩の日本史

福田千鶴・武井弘一[編]

知られざるヒトとタカの関係史
飼いや慣らした鷹を自在に操り、獲物を捕らえる狩猟、鷹狩。
五世紀の古墳時代から江戸幕府瓦解の十九世紀後半に至るまで、鷹狩は権力と深く結びつきながら日本列島において連綿と続けられてきた。そこには、日本の風土や社会のなかで地域・時代・階層、あるいは狩猟の目的等にあわせて独自に発展してきた固有の歴史が存在する。日本史を貫く重要な要素でありながら、等閑視されてきた鷹狩の歴史を紐解き、新たな知の沃野を拓く刺激的な一冊。

※2021年刊『鷹狩の日本史』を増補改訂。新出の鷹狩を記録した絵巻「鷹狩之図」の全編を初めてカラー公開。また、網羅的な鷹・鷹場・環境関係文献一覧を付した決定版。

A5判並製・432頁・2025年12月刊行
978-4-585-32069-2・定価4620円(税込)

洛中洛外図屏風の歴史学

歴博甲本から吉川史料館本まで

大塚活美[著]

洛中洛外図屏風についての既発表論文17本を最新の知見より改訂し、研究史、名称、成立背景、受容と伝来、系統分類、景観年代、金雲の形状、貼り札について考察した新稿16本を加えた、研究の集大成。室町時代後期の洛中洛外図のみならず、江戸時代前期・中期の作品も取り上げ、洛中洛外図? 風を体系的に明らかにする。関連作品を網羅した作品一覧、貼り札のある作品の文字を書き起こした貼り札一覧も収載。歴史学、美術史、建築学、文化史など広く隣接分野に寄与する画期的成果。

A5判上製・740頁・2025年12月刊行
978-4-585-32074-6・定価13200円(税込)

増補改訂版 地域から考える世界史

日本と世界を結ぶ

桃木至朗 [監修] 藤村泰夫・岩下哲典 [編]

グローバル化、多文化共生の時代だからこそ、地域を見つめる視点が求められる。列島各地に世界史を見出す多彩な事例と取り組みを紹介。暗記中心ではない、生きた学びを実現する新たな歴史教育のアイデアとモデルを提示。感染症対策と平和学習をテーマとした歴史教育の取り組みを紹介する論考2本を追加し、増補改訂版として装い新たに刊行。

※『地域から考える世界史』(2017年11月刊行、ISBN978-4-585-22191-3)の増補改訂版です。

A5判並製・512頁・2025年12月刊行
978-4-585-32071-5・定価5280円(税込)

日本酒を読み解く

歴史・文化・技術

畑有紀・芳澤元 [編]

古来、人々の生活に根付いてきた「日本酒」。日本酒は、神道や仏教をはじめとする信仰とどのように関わってきたのか。物語や小説といった文学ではどう描かれてきたのか。酒税制度の変遷や酒造業、また、杜氏集団や酒蔵で働く人々の組織は地域経済・社会でどのような役割を果たしてきたのか。さらには、酒をめぐる言葉や表現はどのような変遷をとげてきたのか。歴史学、文学、経済学、経営学など人文社会科学領域の諸分野からアプローチし、多層的な広がりをもつ日本酒の文化の在り方を体系的に捉える。

アジア遊学312・A5判並製・256頁・2025年12月刊行
978-4-585-32558-1・定価3300円(税込)

勉誠社 新刊案内 日本史

古文書が映しだす 江戸末期の信州松島村

日野正紀 [著]

信州松島村(現・長野県上伊那郡箕輪町松島)における名主格の百姓・門屋に残る「門屋文書」。江戸時代初期から末期に至る五〇〇点超の文書群を紐解き、穀物や野菜といったモノの移動や冠婚葬祭・娯楽・医療・教育など当時の百姓たちの日常、さまざまな身分・職業の人々が往来する伊那街道の実態を紹介。門屋十四代目にあたる著者が、丹念な文書読解、客観的な数値分析によって、当時の農村の実態を百姓の目線から解明する。「江戸時代の百姓は土地に縛りつけられていた」という古い江戸時代観とはちがう、当時の百姓たちの生き生きとした日々がみえてくる。貴重な文書写真を多数掲載。各種付表・文書目録も完備した快著。

A5判上製・656頁・2025年12月刊行
978-4-585-32084-5・定価5500円(税込)

古文書研究

第100号

日本古文書学会 [編]

歴史学をはじめ、諸分野における研究の基盤をなす古文書学。その最前線を伝える学術雑誌。今号では、100号を記念し、古文書学会の活動に長く携わってこられた方々や、古文書の原本調査の経験豊富な方々による9本のエッセイ、また51号から100号までの総目次も併せて収載。

●収録

▼論文＝室町殿行事と室町期公家社会(林遼)▼一五世紀における非在京荘園領主と室町期荘園制(土山祐之)▼研究ノート＝建武政権下の当知行安堵(坂本陽太)▼足利満兼の元服と左馬頭任官(植田真平)▼刊本『大乘院寺社雑事記』と国立公文書館デジタルアーカイブのデジタル画像について(高山京子)▼『古文書研究』第百号記念特集について(編集委員会)▼エッセイ＝古文書研究と日本古代史(小口雅史)▼あれやこれやと思うこと(上島有)▼古往今来古文書学会(漆原徹)▼「漣返」小考(貫井裕恵)▼ほか

B5判並製・160頁・2025年12月刊行
978-4-585-32410-2・定価4180円(税込)

日本トルコ交流秘史

イスタンブル旧総領事館の100年

NPO法人日本トルコ交流協会 [監修]

ヤマンラール水野美奈子・佐々木紳 [編著]

20世紀初頭のオスマン帝国期に建てられ、長らく日本の在外公館として利用されてきた在イスタンブル日本国旧総領事館の外交史的意義や建築史的価値を中心に、過去から現在に連なる日本トルコ交流の知られざる歴史を紐解く。座談会を収録するほか、旧総領事館の写真を多数紹介。

アジア遊学313・A5判並製・280頁・2026年1月刊行
978-4-585-32559-8・定価3520円(税込)

日本近世・近代村落史研究

渡辺尚志 [著]

日本近世の人口の約八割は村に住む百姓たちだった。彼ら・彼女らの動向を重視することなしに近世史を語ることはできない。近世の村とは何か、百姓たちは何を考え、どのように活動してきたのか――。

村落史研究の本質への問い、災害史・民衆思想史との連環、近世・近代以降期への視点により、近世から近代における村と百姓の展開を位置づける貴重な一書。

A5判上製・384頁・2026年1月刊行
978-4-585-32088-3・定価11000円(税込)

勉誠社 新刊案内 日本史

慶應義塾図書館所蔵 原本「八代日記」

原色影印と翻刻

中島圭一 [編]

肥後国の大名相良氏の家臣による年代記として著名な史料「八代日記」。同書は記録類の乏しい中世九州の史料として貴重なものであるだけでなく、中近世移行期の大名権力論や法制史の研究において重要な材料として盛んに利用されてきた。これまで謄写本およびその翻刻のみが知られるものであったが、近年、その原本の存在が明らかになった。さらに原本の紙背や挿入紙には多数の新出の古文書が残されていた――。原本「八代日記」およびその紙背文書・挿入文書の全編をフルカラーで収載。さらには翻刻、詳細な解題、索引を付した決定版。

B5判上製・440頁・2026年1月刊行
978-4-585-32087-6・定価19800円(税込)

江戸の大家臣団

仲泉剛 [著]

近世の大名は、一万石以上の領地を持つ領主であるとともに、徳川将軍家に従属し様々な公務を果たした。その拠点となった江戸藩邸は、藩主とともに多くの家臣団を置いたことから、規模は小さいが、国元藩庁と類似した藩庁組織が展開した。従来都市史によって位置付けられてきた江戸詰武士を大家臣団として捉え、藩政や国元との関係性を踏まえつつ、江戸詰の実態や彼らの存在形態を考察。彼らが藩社会において担った役割について検証する。

A5判上製・368頁・2026年2月刊行
978-4-585-32089-0・定価11000円(税込)

戦国合戦図屏風・ 絵巻を読む

堀新 [編]

江戸時代以降の制作が大多数である戦国合戦図屏風・絵巻は、歴史学において「二次史料」と軽視され、美術史的にも注目されることは少なかった。しかし、近年、歴史学・美術史・文学などのジャンルを超えた総合的な知見より、戦国合戦図の資料的意義・価値を捉え直す機運が高まっている。戦国合戦図は我々に何を伝えているのか——
現物調査、そして高精細カメラによる撮影データを駆使し、各所に残された合戦図屏風・絵巻を細部まで検討。また、それらの絵画資料を総合的に見渡すことにより、諸ジャンルをまたいだ十九の視角から合戦図屏風・絵巻を読み解く。

図版掲載点数約二〇〇点!

B5判上製・448頁・2026年3月刊行
978-4-585-32082-1・定価14300円(税込)

近代東アジアと張家口

忘却された帝国の最前線

劉建輝 [編]

20世紀前半にはモンゴルやロシアとの交易の要所として、戦時期には「蒙疆」政府の首府として、帝国日本の大陸進出において極めて重要な役割を果たした辺境の町—張家口。複数の民族・国家・文化・政治勢力が出会い、衝突し、融合する場であったこの地は、日中関係や異文化交流においていかなる役割を果たしたのか。多数の日本人が在留した日本の植民統治期には、いかなる文化政策や文芸創作が生み出されたのか。それらが戦後の新中国成立期の国家構築と文化形成においてどのような意味を持っていたのか。張家口の居住経験者と日中の第一線で活躍する研究者による多角的な視点から、張家口の複雑な歴史的経緯と意義、また近代日本の大陸進出の実態とそれに伴う現地の社会や経済、文化などの変容を明らかにする。

A5判並製・240頁・2026年3月刊行
978-4-585-32095-1・定価4950円(税込)

勉誠社
新刊案内
日本史

戒厳令下の台湾文学

本省籍知識人のアイデンティティと日本

工藤貴正 [編]

1945年の敗戦後、台湾では日本統治期からの居住者(本省人)と戦後に渡来した国民党側(外省人)との間で「省籍矛盾」が激化し、二・二八事件を経て長きにわたる戒厳令下へと至った。本考察では、この抑圧的な時代において、本省籍知識人が日本との関係を保持しつつ、いかに自己のアイデンティティを構築したかを検討する。日本語世代から中国語世代に至る三世代の作家の軌跡を辿り、日本文学の翻訳受容や言語教育の実態を分析することで、台湾社会における精神的交流の様相と「省籍矛盾」の深層を明らかにする。

アジア遊学314・A5判並製・304頁・2026年2月刊行
978-4-585-32560-4・定価3850円(税込)

細川家史料と史跡が伝える 近世初期キリシタンの 信仰と逡巡

禁教をめぐる群像

稲葉継陽 [編]

過酷な状況下にあった戦国動乱期以降の日本社会や共同体の形成・変容を考えると、16世紀末におけるキリスト教の爆発的拡大と17世紀の禁教の問題は、見落とすことのない重要なテーマである。信仰と禁教の間で、庶民たちは、そして領主や家臣たちは、何を考え、どのように動いたのか——

細川家に伝来したキリシタンの動向と禁教政策の実態を示す文書・記録資料を紐解き、各地の貴重な史跡と共に分析・解説。名もなき信仰者や弾圧者たちの心性を探ることで一七世紀の社会と人間を描き出す。

A5判並製・216頁・2026年3月刊行
978-4-585-32091-3・定価3850円(税込)

歴史学の見方・考え方

研究の舞台裏

高橋宏明・宮間純一[編]

我々が生きる現代へとつながる過去の出来事を検討し、世界や社会のあり方を考える学問、歴史学。そこに携わる研究者たちは何を考え、どのように研究に取り組んでいるのか。歴史への向き合いかた、研究の視点、隣接分野との関わりなどを、研究者それぞれのリアルな試行錯誤とともに紹介。中央大学文学部で歴史学を探究する研究者たちによる、歴史とより深く付き合っていくための羅針盤となる一冊!

四六判並製・304頁・2026年3月刊行
978-4-585-32092-0・定価2200円(税込)

中・近世門跡論の可能性

貴種住持の寺はいかに存続したのか

近藤祐介・石津裕之[編]

日本中世、血統に基づく尊卑観念が寺院社会にも及んだことなどを契機として、顕密寺院において「貴種」が住持を務める寺、門跡が成立した。これら門跡は、法門嫡流という圧倒的な宗教的権威のもと、世俗権力とも密接に関わり、宗教的・政治的影響力を行使しうる存在としてあった。近世に入り、門跡は江戸幕府の寺院統制策のもとに置かれ、世俗社会における影響力は大きく低下することとなったが、諸宗の本山や本寺として位置付けられ、また、天台座主や園城寺長吏などの要職を務めるなど、寺院社会における特別な立場を有し、特に門主はその出自ゆえに公家社会の一員としての側面から世俗社会とも密接な関係を持ち続けていた。門跡はいかにして中・近世を通じて存続し続けることが出来たのか——これまで分断されてきた中世・近世の門跡研究を接続し、対話を深めることで、中・近世における寺院社会の連続面と断絶面を浮き彫りにする画期的成果。

アジア遊学315・A5判並製・256頁・2026年3月刊行
978-4-585-32561-1・定価3520円(税込)

勉誠社
新刊案内
日本史

絵画史料を読む

中世・近世の生活文化史

斉藤研一[著]

疫病が流行した時、人々はどんな行動をとったのか。女性たちは、日々どんな仕事をしていたのか。酒呑絵巻から読み取れることは何か。そして幕末の錦絵に描かれた朝比奈義秀とは。暖簾や看板、酒宴の様子や、人と動物の関わりなど、絵巻物や洛中洛外図に描かれた図像を比較・検討し、共通点や差異、変化を読み解き、その時代を生きた人々の生活の様相、考え方を明らかにする。絵画史料を読むための実践入門書。

四六判上製・352頁・2026年3月刊行
978-4-585-32090-6・定価4620円(税込)

舞楽図の近世的展開

形成・変奏・復古

古谷美也子[著]

八世紀に律令国家の成立とともに国家の儀礼を荘厳するものとして制度化され、以来、現在に至るまで千三百年以上にわたり、わが国の宮中行事や主要な寺社の法会などで催されてきた舞を伴う音楽である舞楽。この舞楽を独立した画題とする「舞楽図」には、曲目ごとの舞人・楽人あるいは舞楽が催される情景などが描かれている。舞姿や装束など故実の記録画でもあり、王朝文化の象徴ともいえる舞楽図は、近世期の武家社会においてどのように受容され、武家の文化として浸透し、そしてどのようにやまと絵の画題として広まっていったのか。中世末から近世後期までの舞楽図の作例を順に取り上げ、描かれた舞楽の様相と制作背景、そして同時代の社会背景に目を向けながら、その変遷を考察する。

A5判上製・400頁・2026年5月刊行
978-4-585-37024-6・定価9900円(税込)

モノづくりから見る 古代・中世の 博多湾沿岸地域

保存科学調査が明かす生産と流通

比佐陽一郎[著]

博多湾沿岸地域から発見された考古資料を対象に、保存科学的手法による調査を行うことで、製品の科学的な特徴を見出すとともに、それらの流通の特質についても考察。新たな視点から資料を解釈することで、弥生時代から中世に至るまで、我が国における最先端の工芸品生産拠点であり続けた博多湾沿岸地域の特徴を明らかにする。

B5判上製・512頁・2026年3月刊行
978-4-585-32093-7・定価16500円(税込)

アジアの都市遺産と 祭祀・仏教

西本昌弘[編]

東アジアには古代より様々な都市があり、異国からの人々が行き交い、交流があった。古代の大和・河内にはどのようにして渡来人が定着したのか。日本の都城などに築かれた官大寺や祭祀施設と、中国・契丹などの首都に造られた寺院や施設にはどのような共通点があるのか。アジア各地の都市は宗教とどのようにかかわり、どのように構築されてきたのか。アジアにおける都市構造と宗教儀礼空間の関係を検討する。

アジア遊学317・A5判並製・224頁・2026年3月刊行
978-4-585-32563-5・定価3520円(税込)

勉誠社
新刊案内
日本史

Crypto-Kirishitan Relics in Japan

(潜伏切支丹遺物考)

鈴木秀三郎(Hidesaburo SUZUKI) [著]

明治期のジャーナリストであり、潜伏キリシタンの研究者でもあった鈴木秀三郎。本書は、彼が日本における宗教迫害の実態を広く海外に紹介する目的で、すべて英文で執筆したものである。彼が研究にあたって収集した遺物および関連資料52点の写真を掲載し、解説を付す。あわせてキリシタン迫害の概観をまとめた論考を収載。宗教的不寛容のもとで製作・保護・活用されてきた、特異な信仰の形態を紹介する貴重書。

※本書は1975年に遺族の手によって書籍化された私家版を頒布するものです。広く海外での研究に資することを意図し、本論は英文にて構成されております。尚、経年の劣化(ヤケ・傷み)がございますことを何卒ご了承ください。

B5判上製・82頁・2026年4月刊行
978-4-585-32097-5・定価6600円(税込)

古文書考証が読み解く 戦国今川氏

大石泰史[著]

戦国時代の研究は日々進化を遂げている。それを支えているのは、古文書をはじめとする新たな史資料の発見・発掘である。モノとしての古文書のあり方に目を向けると、そこにはより多くの情報が残されている。定型の文言、花押、印判、紙の大きさ、折り方、封の仕方など、文書がどのようなルールに基づいてしたためられているのか=「書札礼」。また、文書の作成者(発給者)と受信者(受給者)との関係性は如何なるものであったのか、どのようなきっかけで文書が作られ、なぜ伝来してきたのか=「当事者主義」。古文書を読み解くための重要な二つの視点を駆使し、近年、新史料の発見や既存の見解の捉え直しにより研究の進展が激しい今川氏について、最新の研究、これからの論点を詳細に解説。「豊臣兄弟!」ほか、さまざまな大河ドラマの古文書考証を務め、古文書の見方・読み方に精通した著者による、古文書から歴史を読み解くための入門の一冊!

四六判並製・288頁・2026年5月刊行
978-4-585-32086-9・定価3850円(税込)

日本中世の畠作と雑穀

「水田中心史観」批判

木村茂光〔著〕

水田を中心に語られることの多かった、中世の農業生産。しかし、そのすぐ側には、水田と遜色のない面積をもつ畠地が広がり、そこでは多くの作物が実り、人々の暮らしを支えていた。水田以外の耕地や生産は農民の存在形態や生活にどのような規定性を与えていたのか。畠作ではどのような作物が出来、どのような道具・農具が使われ、どのような制度があったのか。「水田中心史観」を見直し、畠作史、雑穀史という視点から中世民衆の社会史を解き明かす。

A5判上製・328頁・2026年5月刊行
978-4-585-32101-9・定価11000円(税込)

大学の自治と日本近代史

中田薫懐旧夜話と関連史料

北康宏〔編集・註解〕

七博士事件、沢柳事件、森戸事件、河上事件、大森・平野助教授追放、瀧川事件、配属将校増員問題、天皇機関説問題——、明治から昭和初期の「大学の自治」「学問の自由」をめぐる著名な事件について、その当事者たちが赤裸々に語った珠玉の口述史料と関連史料を集成する。初公開となる法制史研究者中田薫の回顧録『中田薫懐旧夜話』を翻刻して註解を加え、関連史料の中田の盟友石井崑『東大とともに五十年』(1978年)、田中耕太郎・末川博・我妻栄・大内兵衛・宮沢俊義『大学の自治』(1963年)、田中耕太郎『大学自治制確立に至るまでの経緯』(『教育と権威』1946年)を付す。碩学たちの貴重な証言から、大学と学問のあるべき姿を見つめなおす。

A5判並製・736頁・2026年5月刊行
978-4-585-33008-0・定価14300円(税込)

勉誠社
新刊案内
日本史

新しい日本考古学

出発のための方法論

竹岡俊樹〔著〕

考古学とは、徹底的に資料分析を行うこと、そして、その結果を日本文化についての知識とそこから創った文化モデルで解釈することである。2000年11月に発覚した旧石器捏造事件から25年。考古学という学問をいちど解体し、新たな方法を創るために研究を続けてきた著者による「新しい日本考古学」の提案。

A5判並製・240頁・2026年5月刊行
978-4-585-32083-8・定価3850円(税込)

古文書研究

第101号

日本古文書学会〔編〕

歴史学をはじめ、諸分野における研究の基盤をなす古文書学。その最前線を伝える学術雑誌。

●収録

論文＝天文年間における飛鳥井家の西国下向と南九州の地域権力(中村昂希)▼戦国期の判物に関する一考察(畑山周平)▼近世近代を通じた譜代御家人家の身分変遷(尾脇秀和)▼研究ノート＝「候」字形の変化と候文の形成(山本久)▼明治四年撮影の明治天皇写真をめぐる交渉とその後(篠崎佑太)▼地域と古文書＝神戸に拠点をおく古文書会読会・六史会について(高槻泰郎)▼随筆＝雪舟『破墨山水図』は特別な料紙に描かれていた(橋本雄)▼松永弾正登場前夜の和(村井祐樹)▼書評と紹介▼日本古文書学会第五十七回学術大会要旨▼彙報▼口絵解説＝琉球国王朱印状(宮田直樹)▼英文レジュメ

B5判並製・146頁・2026年6月刊行
978-4-585-32411-9・定価4180円(税込)

彰義隊

その事実と真実

大藏八郎[著]

江戸最後の年となった慶応4年(1868)はペリー来航以来の尊攘の政治闘争が公然たる戊辰己巳の東西内戦に転じた年で、3000年の日本全史における最大の変革期だったが、この変革のシンボルが上野戦争である。本来、明治維新の全体像を正しく捉えるには彰義隊の上野戦争を検証することが不可欠であり、幕末史は彰義隊を抜きに語ることはできない。「幕末の花」とも称された彰義隊の結成から終焉までの事実を正し、彰義隊士の心情と彰義隊の真実に迫る。先行する2冊、『彰義隊士の手紙』(2024年)、『新彰義隊戦史 増補改訂版』(2025年)のエッセンスを抽出し、新たな視点と情報を加味。彰義隊の最新の全体像をコンパクトに知る一冊。

四六判並製・416頁・2026年6月刊行
978-4-585-32100-2・定価4180円(税込)

北条貞時の時代

北条氏研究会[編]

北条時宗の嫡男として生まれ、十四才という若さで鎌倉幕府第九代執権となった北条貞時。この時代は得宗専制と呼ばれる時期の後半にあたり、前代である時頼・時宗期と比べ政治・社会体制が変質を迎えていく時期であった。蒙古襲来以降の鎌倉時代の後期であり、後の南北朝時代へと続く時代の転換点である北条貞時の時代を通じて、鎌倉時代後期の北条氏、鎌倉幕府、中世社会を明らかにする。

A5判並製・736頁・2026年6月刊行
978-4-585-32103-3・定価16500円(税込)

勉誠社
新刊案内
日本史

新装版 長崎の鐘

付・マニラの悲劇

永井隆[著]

1945年8月9日。長崎に原子爆弾が投下された。長崎医科大学の医学者であった永井隆は、自らも負傷しながらも救護にあたり、目の当たりにした被爆の実態を、透徹した視点と筆致で克明に記録し続けた——。連合国軍総司令部の検閲により付された「マニラの悲劇」も併載した初版の姿を再現。世界のいたるところで戦争や暴力・不条理が影を落とす現代、「核の悲劇」を二度と繰り返さないための、痛切なる警鐘。

四六判並製・258頁・2026年6月刊行
978-4-585-39064-0・定価2200円(税込)

帝国劇場

洋楽・洋舞興行と日本の近代化

森本頼子・井口淳子・大西由紀[編著]

1911(明治44)年に、東京・丸の内に開場した日本初の本格的な洋式大劇場・帝国劇場。「今日は帝劇、明日は三越」という広告のキャッチフレーズが流行語になるほどに、この劇場は大正期の都市生活を象徴する存在であり、近代日本の演劇・エンターテインメントの聖地として輝きを放ち続けてきた。初代支配人・山本久三郎の貴重な新出資料をひもとく、明治から昭和初期にいたる劇場経営の実態、建築の変化、女優の養成、消費・文化活動の実態など、多角的視点から考察。帝国劇場が、歌舞伎を中心とした伝統芸能から新劇、洋楽、オペラ、ダンス、バレエ、ミュージカルへと興行の幅を広げ、洋楽・洋舞上演の一大メッカに変貌していく過程を明らかにし、知られざる大正、昭和前期の歴史を鮮やかに描き出す。激動の時代を駆け抜けた舞台人たちの挑戦を描く、音楽・舞踊・演劇ファン、近代文化史ファン必読の一冊。

アジア遊学321・A5判並製・248頁・2026年7月刊行
978-4-585-32567-3・定価3300円(税込)

仏典を通して見る日本文化

奈良・平安期における
仏教の受容・融合・展開

富樫進 [編]

奈良時代から平安時代中期に撰述された仏典注釈や論書・説話集などの文献資料。もともとはインドの言語(梵字・悉曇)で記されたこれらの資料はどのように漢語や和語に翻訳され、どのように、日本文化に受容されていったのか。『万葉集』『日本霊異記』はもとより、記紀・神話・平安期の漢詩文や女流文学、近代の哲学者・和辻哲郎まで幅広い視点から、仏典注釈から発信された知識が日本文学・思想・文化へ与えた影響を解明する。

アジア遊学322・A5判並製・288頁・2026年7月刊行
978-4-585-32568-0・定価3520円(税込)

勉誠社
新刊案内
日本史

アク・ベシム遺跡を掘る

よみがえるシルクロードの交易都市

山内和也・齊藤茂雄【編】

中央アジアのキルギス共和国にあるアク・ベシム遺跡。この遺跡は、5～11世紀頃にスイヤブ(碎葉・素葉とも)と呼ばれた古代都市の遺跡である。スイヤブはシルクロード交易の民ソグド人によって形成され、草原の遊牧勢力や中国王朝の唐、さらにはイスラームのカラハン朝が拠点とした多文化融合の国際交易都市であった。都市はいかにして造られ、展開したのか。東西の人びとはここでどのように暮らし、交流していたのか。最新の発掘調査と、文献史学・美術史学・地理学・民俗学等、関係分野の知見から、都市スイヤブとその周辺世界の歴史を明らかにする。

アジア遊学302・A5判並製・292頁・2025年4月刊行
978-4-585-32548-2・定価3520円(税込)

北欧ロマンとナショナリズム

内村鑑三・開拓・民族主義

中丸禎子・田中琢三【編】

「幸せな北欧」「世界一幸福な国デンマーク」…日本における「北欧」の典型的なイメージは「幸せ」「幸福」をキーワードにしたものが多い。「幸福度ランキング」の順位、福祉の充実、ジェンダー平等、無償の高等教育といった具体例が付されることも多い。そのような日本でのイメージは、どのように形成されてきたのか。周辺の大国の動向に翻弄された北欧の近現代史において、実際の社会はどのように変化し、世界にどのような影響を与えたのか。内村鑑三『デンマルク国の話』を参照軸に、北欧や日本の実像とイメージの分析を通じて、「幸せな北欧」とそれを存立させてきた歴史、その歴史を紡いだ人間の良心や勤勉さ、誠実さの中に潜む不可視化された暴力、差別、排除の実態を検証。近現代の日本・北欧・ヨーロッパの思想や宗教を分野横断的に考察する。

アジア遊学304・A5判並製・368頁・2025年6月刊行
978-4-585-32550-5・定価4180円(税込)

勉誠社
新刊案内

東洋文化
東洋史

中国学術を貫く視座

章学誠の可能性

古勝隆一・竹元規人【編】

中国学術は、その歴史において、経学・語学・史学・諸子学・文学・医学・天文学、その他の学術を含んできた。それだけに、学術はそれぞれの専門に分化しがちでもあった。しかし、清朝中期に、そのような細分化をよしとせず、あらゆる歴史的な事象を貫通する「通」という発想のもと、学術・思想・書物・歴史・文学をとらえ直そうとした「変わった学者」が登場した——「章学誠」(1738～1802)である。

その構想を書き著した『文史通義』をはじめとするテキストを詳細に読み解くことで、その思想を育んだ様々な脈絡、章学誠の学説・思想の同時代的意義、また、その学説が後世に与えた影響や展開について、多角的な視点から論究する。章学誠が後世に向けて発したメッセージを受けとめ、その意義と可能性を問う。

アジア遊学311・A5判並製・288頁・2025年12月刊行
978-4-585-32557-4・定価3520円(税込)

日本トルコ交流秘史

イスタンブル旧総領事館の100年

NPO法人日本トルコ交流協会【監修】

ヤマンラール水野美奈子・佐々木紳【編著】

20世紀初頭のオスマン帝国期に建てられ、長らく日本の在外公館として利用されてきた在イスタンブル日本国旧総領事館の外交史的意義や建築史的価値を中心に、過去から現在に連なる日本トルコ交流の知られざる歴史を紐解く。座談会を収録するほか、旧総領事館の写真を多数紹介。

アジア遊学313・A5判並製・280頁・2026年1月刊行
978-4-585-32559-8・定価3520円(税込)

近代東アジアと張家口

忘却された帝国の最前線

劉建輝[編]

20世紀前半にはモンゴルやロシアとの交易の要所として、戦時期には「蒙疆」政府の首府として、帝国日本の大陸進出において極めて重要な役割を果たした辺境の町—張家口。複数の民族・国家・文化・政治勢力が出会い、衝突し、融合する場であったこの地は、日中関係や異文化交流においていかなる役割を果たしたのか。多数の日本人が在留した日本の植民統治期には、いかなる文化政策や文芸創作が生み出されたのか。それらが戦後の新中国成立期の国家構築と文化形成においてどのような意味を持っていたのか。張家口の居住経験者と日中の第一線で活躍する研究者による多角的な視点から、張家口の複雑な歴史的経緯と意義、また近代日本の大陸進出の実態とそれに伴う現地の社会や経済、文化などの変容を明らかにする。

A5判並製・240頁・2026年3月刊行
978-4-585-32095-1・定価4950円(税込)

歴史学の見方・考え方

研究の舞台裏

高橋宏明・宮間純一[編]

我々が生きる現代へとつながる過去の出来事を検討し、世界や社会のあり方を考える学問、歴史学。そこに携わる研究者たちは何を考え、どのように研究に取り組んでいるのか。歴史への向き合いかた、研究の視点、隣接分野との関わりなどを、研究者それぞれのリアルな試行錯誤とともに紹介。中央大学文学部で歴史学を探究する研究者たちによる、歴史とより深く付き合っていくための羅針盤となる一冊!

四六判並製・304頁・2026年3月刊行
978-4-585-32092-0・定価2200円(税込)

勉誠社
新刊案内
東洋文化
東洋史

中国の舞台

伊藤茂・中山文[著]

2000年から2021年までを中心とする、北京で開催された演劇の感想や考察、芝居の見方、日本演劇との比較等について歯切れのよい軽妙な文体で綴った劇評(第1章)、2000年から2015年の中国の社会情勢と演劇会全体の状況、上演された演劇フェスティバルや話劇・戯曲等を整理した公演記録(第2章)、演劇研究者や演出家、劇作家についての評論・批評(第3章)の三章により構成。日本有数の中国演劇ウォッチャーと中国文学研究者が、中国演劇の魅力と社会の変化に伴い変わりゆく中国演劇界の姿を描き出す。観劇の道標・記録となる、中国演劇研究者・ファン必携の一冊。中国演劇界の117名の略歴を紹介した「中国演劇人小事典」も収載。

A5判上製・404頁・2026年3月刊行
978-4-585-37027-7・定価5940円(税込)

「文人画」と近代

概念・中国絵画史学・国画

李趙雪[著]

中国の「文人画」は唐代の王維に始まるとされ、文人士大夫が余技として描いた絵画を指す。宮廷画院や民間絵画とは異なり、ときに異民族支配や政治腐敗への不満も託され、長らく中国絵画史の中軸とみなされてきた。しかし近年、欧米や東アジアでは、この概念自体が問い直されている。「文人画」という概念は、いつ・どこで・誰によって形成されたのか。それは中国でどのように受容されていったのか。今日の中国美術イメージの形成にどのような役割を果たしたのか。近世日本の中国美術認識が近代に再編され、日中交流を通じて共有されていった「文人画」は、東アジアのみならず、ヨーロッパ、さらに戦後のアメリカでの中国美術史研究にまで連動する。大きな「中国の文人画」という問題を、多数の図版とともに新視点から検証する意欲作。

A5判上製・544頁・2026年4月刊行
978-4-585-37026-0・定価11000円(税込)

杜甫研究年報

第九号

日本杜甫学会 [編]

その詩は、それ以前の詩の総括であるとともに、以後の中国詩の出発点でもある。日本においては、五山の僧の崇敬、芭蕉の傾倒があり、明治以後も、中江兆民・島崎藤村・正岡子規を始め、知識人・国民の間で、その親愛の念は一貫して揺るがないものだった。漢文教育においても、杜甫の詩は教材の中で重要な位置を占めてきた。世界における杜甫への関心を見つめつつ、変転する時の中で無窮の未来に向かって杜甫研究を発展させ続ける一冊。

杜甫研究年報9・A5判並製・96頁・2026年4月刊行
978-4-585-39449-5・定価2200円(税込)

アジアの都市遺産と 祭祀・仏教

西本昌弘 [編]

東アジアには古代より様々な都市があり、異国からの人々が行き交い、交流があった。古代の大和・河内にはどのようにして渡来人が定着したのか。日本の都城などに築かれた官大寺や祭祀施設と、中国・契丹などの首都に造られた寺院や施設にはどのような共通点があるのか。アジア各地の都市は宗教とどのようにかかわり、どのように構築されてきたのか。アジアにおける都市構造と宗教儀礼空間の関係を検討する。

アジア遊学317・A5判並製・224頁・2026年3月刊行
978-4-585-32563-5・定価3520円(税込)

勉誠社
新刊案内
東洋文化
東洋史

唐代国際文書研究

訳註 陸贄・白居易・李徳裕・封敖の国書

金子修一 [著]

国家間で交わされる文書、国書——。その形式的特徴は冒頭の書式に鮮明に現れる。しかし、書式が丁寧であっても内容が強硬な場合もあり、特に唐と異民族との間に交わされた国書については、冒頭と内容との関係に留意しながら読み解いていくことが肝要である。じゅうらい盛唐の玄宗朝までの唐代国書の研究に取り組んできた著者は、本書では唐の勢いが次第に傾いていく唐代後半の国際関係の動きと重ね合わせつつ、白居易・陸贄・李徳裕・封敖が残した国書など、内容の伝わる同時期の国書ほぼすべてを丹念に読み解く。そこからは唐の朝廷と有力な異民族の有力者との遣り取りや、辺境における唐の官僚と異民族との駆け引きを如実に窺うことができる。

A5判並製・352頁・2026年5月刊行
978-4-585-32102-6・定価3850円(税込)

敦煌変文・俗講と 民間信仰の世界

大地の文学と信仰

荒見泰史 [編]

中国西北、甘肅省西南部に位置し、古来より東西往来の要衝として栄えてきた敦煌。この土地から一九〇〇年に発見された「藏経洞」文献は約六万四〇〇〇点に及び、その大半は手書きで、経典、注釈、帳簿、書状、地方行政文書、歌謡、説話、教育用の手本など、その内容は驚くほど多岐にわたる。その中核をなす一群が、講唱文学と呼ばれる文献群——変文、講経文、押座文、讃文、取散文などである。それらの多様な史料は、どのように交錯し重なり合い、歴史的現実を描き出してきたのか。そして、その文化的営為が日本を含む東アジアへとどのように伝播し、変容し、再創造されてきたのか。六朝から唐宋にかけての東アジア世界において、人々がいかに「大地」に根ざしながら文学を生み出し、信仰を育み、思想を形成してきたのかを問い直す。

アジア遊学319・A5判並製・336頁・2026年6月刊行
978-4-585-32565-9・定価3850円(税込)

日本宗教文化史の射程

吉原浩人[監修]鈴木英之・平沢卓也・崔鵬偉[編]

日本の文学・歴史・美術にはさまざまな宗教の影響が見取れる。絵画とテキストにはどのような関係性があるか。法会次第を記す講式、寺社の由来を示す縁起から、何が読み解けるのか。平安時代の思想・宗教・文学・歴史はいかに形成されてきたのか。

禅宗思想や中近世の神道説はどのように展開したのか。宗教文化史の視点から前近代の日本を問い直す画期的な一書。

A5判上製・448頁・2026年3月刊行
978-4-585-31027-3・定価9900円(税込)

中・近世門跡論の可能性

貴種住持の寺はいかに存続したのか

近藤祐介・石津裕之[編]

日本中世、血統に基づく尊卑観念が寺院社会にも及んだことなどを契機として、顕密寺院において「貴種」が住持を務める寺、門跡が成立した。これら門跡は、法門嫡流という圧倒的な宗教的権威のもと、世俗権力とも密接に関わり、宗教的・政治的影響力を行使しうる存在としてあった。近世に入り、門跡は江戸幕府の寺院統制策のもとに置かれ、世俗社会における影響力は大きく低下することとなったが、諸宗の本山や本寺として位置付けられ、また、天台座主や園城寺長吏などの要職を務めるなど、寺院社会における特別な立場を有し、特に門主はその出自ゆえに公家社会の一員としての側面から世俗社会とも密接な関係を持ち続けていた。門跡はいかにして中・近世を通じて存続し続けることが出来たのか——これまで分断されてきた中世・近世の門跡研究を接続し、対話を深めることで、中・近世における寺院社会の連続面と断絶面を浮き彫りにする画期的成果。

アジア遊学315・A5判並製・256頁・2026年3月刊行
978-4-585-32561-1・定価3520円(税込)

勉誠社
新刊案内
仏教
関連

宗教のダイナミズム

アジアの地域形成を読み解く

宮坂清[編]

私たちが生きる「地域」は、常に変化し続けている。その過程に宗教はいかに関与しているのだろうか。受け継がれてきた歴史や民俗、街に点在する神社仏閣や教会、宗教家や政治家の活動、さらにはインターネットを通じた信念や価値観の流通…。これらは相互に結びつきながら、地域の生成、維持、変容に作用してきた。地域を固定的な地理単位としてではなく、人々の日常の実践の反復を通じて形づくられる文化的特性＝ローカリティ(「地域性」)概念を手がかりに動的なものとして捉え、地域形成や国家統治、戦争、植民地支配、家族形成といった多様な局面において、宗教が果たしてきた実践的な作用を歴史学・神学・国際政治学・文化人類学など多様な視点から検討する。

アジア遊学316・A5判並製・208頁・2026年3月刊行
978-4-585-32562-8・定価3080円(税込)

アジアの都市遺産と 祭祀・仏教

西本昌弘[編]

東アジアには古代より様々な都市があり、異国からの人々が行き交い、交流があった。古代の大和・河内にはどのようにして渡来人が定着したのか。日本の都城などに築かれた官大寺や祭祀施設と、中国・契丹などの首都に造られた寺院や施設にはどのような共通点があるのか。アジア各地の都市は宗教とどのようにかかわり、どのように構築されてきたのか。アジアにおける都市構造と宗教儀礼空間の関係を検討する。

アジア遊学317・A5判並製・224頁・2026年3月刊行
978-4-585-32563-5・定価3520円(税込)

仏典を通して見る日本文化

奈良・平安期における
仏教の受容・融合・展開

富樫進 [編]

奈良時代から平安時代中期に撰述された仏典注釈や論書・説話集などの文献資料。もともとはインドの言語(梵字・悉曇)で記されたこれらの資料はどのように漢語や和語に翻訳され、どのように、日本文化に受容されていったのか。『万葉集』『日本霊異記』はもとより、記紀・神話・平安期の漢詩文や女流文学、近代の哲学者・和辻哲郎まで幅広い視点から、仏典注釈から発信された知識が日本文学・思想・文化へ与えた影響を解明する。

アジア遊学322・A5判並製・288頁・2026年7月刊行
978-4-585-32568-0・定価3520円(税込)

勉誠社
新刊案内
仏教
関連

高木東六パリ音楽留学日記

1928年～1931年

藤井浩基[著]

昭和から平成にかけて作曲家、ピアニストとして名を馳せ、2026年に没後20年を迎える音楽家高木東六(1904-2006)。高木が1928年12月から1931年12月のパリ留学時代に書き留めた自筆の日記4冊を翻刻。東京音楽学校退学から留学に至る経緯、パリでの生活、島崎藤村次男で洋画家の島崎鶏二や銅版画家浜口陽三、演劇研究者川島順平ら日本人留学生との交遊など、高木の日常が生き生きと記述された貴重な一級資料に詳細な解説とコラム「東六交流録」を添えて提供する。1930年前後のパリ音楽界の実相や学際的な人的交流、高木の知られざる人物像を明らかにした画期的成果。日本近代音楽史研究、日仏交流研究に必備の一冊。

A5判上製・548頁・2025年12月刊行
978-4-585-37022-2・定価12100円(税込)

文化財を未来につなぐ 博物館と学芸員の仕事

学芸員をめざす人へ

高木徳郎[編著]

基礎知識や法制度から、企画・展示、作品の収集や保存・修理、調査研究など多岐にわたる博物館活動の現状と課題、具体的な仕事のノウハウまでを平易に解説。学芸員の実体験やエピソードのほか、地域の文化財を未来につなぐための博物館の活動の実例を豊富に収録し、これからの博物館のあるべき姿や学芸員にとって最も大事なことを学べる入門書。学芸員志望の学生をはじめ、自治体職員として文化財保護や観光・地域振興政策の立案・推進に携わっている人、博物館のファンやサポーターとして博物館を支えている人にとって必備の一冊。

A5判並製・352頁・2025年11月刊行
978-4-585-30022-9・定価3080円(税込)

勉誠社
新刊案内
美術・芸術
文化財学

洛中洛外図屏風の歴史学

歴博甲本から吉川史料館本まで

大塚活美[著]

洛中洛外図屏風についての既発表論文17本を最新の知見より改訂し、研究史、名称、成立背景、受容と伝来、系統分類、景観年代、金雲の形状、貼り札について考察した新稿16本を加えた、研究の集大成。室町時代後期の洛中洛外図のみならず、江戸時代前期・中期の作品も取り上げ、洛中洛外図? 風を体系的に明らかにする。関連作品を網羅した作品一覧、貼り札のある作品の文字を書き起こした貼り札一覧も収載。歴史学、美術史、建築学、文化史など広く隣接分野に寄与する画期的成果。

A5判上製・740頁・2025年12月刊行
978-4-585-32074-6・定価13200円(税込)

歌謡と芸態

在原業平の表象

児玉絵里子[著]

『伊勢物語』『源氏物語』などの物語、そして和歌は、若衆歌舞伎の衣裳や美術にどのように取り入れられたのか。そして、それらは琉球宮廷舞踊にどのような影響を与えたのか。描かれた若衆歌舞伎の絵画や、琉球紅型の衣裳に見える文芸表象とは。人々はそこに何を託し、何を伝えようとしたのか。従来各々の視点から言及されることの多かった「歌謡」——踊歌や詞章と、「芸態」——舞踊の所作・振り・型という、文献研究と身体的考察を、多数の絵画や文献から総合的に行った意欲作! 図版点数100点超!

四六判並製・304頁・2026年1月刊行
978-4-585-37023-9・定価4180円(税込)

戦国合戦図屏風・ 絵巻を読む

堀新 [編]

江戸時代以降の制作が大多数である戦国合戦図屏風・絵巻は、歴史学において「二次史料」と軽視され、美術史的にも注目されることは少なかった。しかし、近年、歴史学・美術史・文学などのジャンルを超えた総合的な知見より、戦国合戦図の資料的意義・価値を捉え直す機運が高まっている。戦国合戦図は我々に何を伝えているのか——現物調査、そして高精細カメラによる撮影データを駆使し、各所に残された合戦図屏風・絵巻を細部まで検討。また、それらの絵画資料を総合的に見渡すことにより、諸ジャンルをまたいだ十九の視角から合戦図屏風・絵巻を読み解く。

図版掲載点数約二〇〇点!

B5判上製・448頁・2026年3月刊行
978-4-585-32082-1・定価14300円(税込)

日本宗教文化史の射程

吉原浩人 [監修] 鈴木英之・平沢卓也・崔鵬偉 [編]

日本の文学・歴史・美術にはさまざまな宗教の影響が見取れる。絵画とテキストにはどのような関係性があるか。法会次第を記す講式、寺社の由来を示す縁起から、何が読み解けるのか。平安時代の思想・宗教・文学・歴史はいかに形成されてきたのか。禅宗思想や中近世の神道説はどのように展開したのか。宗教文化史の視点から前近代の日本を問い直す画期的な一書。

A5判上製・448頁・2026年3月刊行
978-4-585-31027-3・定価9900円(税込)

勉誠社
新刊案内
美術・芸術
文化財学

国策紙芝居からみる 日本の戦争 II

神奈川大学非文字資料研究センター
『戦時下国策紙芝居と大衆メディアの研究』班 [編著]

『桃太郎』や『花咲かじいさん』といったなじみのある昔話や民話を改変し、戦争における日本の正統性を子ども達に植え付け、戦意発揚を目的として作成された「国策紙芝居」。1930年代後半から日本教育紙芝居協会を中心に作成され配布された国策紙芝居は、当時、約1000種類作られたといわれ、その全体像はまだまだ不明な点が多く残されている。本書は2018年に刊行した『国策紙芝居からみる日本の戦争』未収録の、国内外に保存されている国策紙芝居287点を、あらすじとともに、フルカラーで紹介。紙芝居にかかわった人物の経験に深く潜り込みながら、その思想や意識のありようを描き、また、植民地や戦場、銃後の経験のなかで紙芝居という文化がどのように意識化されたかを考察する論考を収録。国策紙芝居を通して、当時の戦争に対する見方や、日本を取り巻いていた状況を知ることのできる一冊。

A4判並製・480頁・2026年3月刊行
978-4-585-37025-3・定価11000円(税込)

「文人画」と近代

概念・中国絵画史学・国画

李趙雪 [著]

中国の「文人画」は唐代の王維に始まるとされ、文人士大夫が余技として描いた絵画を指す。宮廷画院や民間絵画とは異なり、ときに異民族支配や政治腐敗への不満も託され、長らく中国絵画史の中軸とみなされてきた。しかし近年、欧米や東アジアでは、この概念自体が問い直されている。「文人画」という概念は、いつ・どこで・誰によって形成されたのか。それは中国でどのように受容されていったのか。今日の中国美術イメージの形成にどのような役割を果たしたのか。近世日本の中国美術認識が近代に再編され、日中交流を通じて共有されていった「文人画」は、東アジアのみならず、ヨーロッパ、さらに戦後のアメリカでの中国美術史研究にまで連動する。大きな「中国の文人画」という問題を、多数の図版とともに新視点から検証する意欲作。

A5判上製・544頁・2026年4月刊行
978-4-585-37026-0・定価11000円(税込)

絵画史料を読む

中世・近世の生活文化史

齊藤研一[著]

疫病が流行した時、人々はどんな行動をとったのか。女性たちは、日々どんな仕事をしていたのか。酒呑絵巻から読み取れることは何か。そして幕末の錦絵に描かれた朝比奈義秀とは。暖簾や看板、酒宴の様子や、人と動物の関わりなど、絵巻物や洛中洛外図に描かれた図像を比較・検討し、共通点や差異、変化を読み解き、その時代を生きた人々の生活の様相、考え方を明らかにする。絵画史料を読むための実践入門書。

四六判上製・352頁・2026年3月刊行
978-4-585-32090-6・定価4620円(税込)

舞楽図の近世的展開

形成・変奏・復古

古谷美也子[著]

八世紀に律令国家の成立とともに国家の儀礼を荘厳するものとして制度化され、以来、現在に至るまで千三百年以上にわたり、わが国の宮中行事や主要な寺社の法会などで催されてきた舞を伴う音楽である舞楽。この舞楽を独立した画題とする「舞楽図」には、曲目ごとの舞人・楽人あるいは舞楽が催される情景などが描かれている。舞姿や装束など故実の記録画でもあり、王朝文化の象徴ともいえる舞楽図は、近世期の武家社会においてどのように受容され、武家の文化として浸透し、そしてどのようにやまと絵の画題として広まっていったのか。中世末から近世後期までの舞楽図の作例を順に取り上げ、描かれた舞楽の様相と制作背景、そして同時代の社会背景に目を向けながら、その変遷を考察する。

A5判上製・400頁・2026年5月刊行
978-4-585-37024-6・定価9900円(税込)

勉誠社
新刊案内
美術・芸術
文化財学

チリメン絵

ゴッホを魅了した知られざる出版文化

編集部[編]

「チリメン絵」をご存じだろうか。浮世絵などが印刷された和紙を四方八方より揉んで縮め、織物のちりめんのような質感を出したもので、最近では書物として仕立てられた「チリメン本」のほうが名を知られているかもしれない。「チリメン絵」は「チリメン本」をさかのぼること数十年前に生まれ、はやく海外にも伝わり、なんと、かのゴッホの《タンギー爺さん》にも書き込まれていることが明らかとなった。これら「チリメン絵」はどのように作られ、また、どのように海外の画家やコレクターに愛されるようになったのか。文理の枠組みを超えて、多面的視野からチリメン絵という知られざる東西交流の一コマに初めてメスをいれる画期的特集。

書物学32・B5判並製・120頁・2025年11月刊行
978-4-585-30732-7・定価2200円(税込)

帝国劇場

洋楽・洋舞興行と日本の近代化

森本頼子・井口淳子・大西由紀[編著]

1911(明治44)年に、東京・丸の内に開場した日本初の本格的な洋式大劇場・帝国劇場。「今日は帝劇、明日は三越」という広告のキャッチフレーズが流行語になるほどに、この劇場は大正期の都市生活を象徴する存在であり、近代日本の演劇・エンターテインメントの聖地として輝きを放ち続けてきた。初代支配人・山本久三郎の貴重な新出資料をひもとき、明治から昭和初期にいたる劇場経営の実態、建築の変化、女優の養成、消費・文化活動の実態など、多角的視点から考察。帝国劇場が、歌舞伎を中心とした伝統芸能から新劇、洋楽、オペラ、ダンス、バレエ、ミュージカルへと興行の幅を広げ、洋楽・洋舞上演の一大メッカに変貌していく過程を明らかにし、知られざる大正、昭和前期の歴史を鮮やかに書き出す。激動の時代を駆け抜けた舞台人たちの挑戦を描く、音楽・舞踊・演劇ファン、近代文化史ファン必読の一冊。

アジア遊学321・A5判並製・248頁・2026年7月刊行
978-4-585-32567-3・定価3300円(税込)

日本の図書館建築

増補改訂版

プロジェクトから日常へ

五十嵐太郎・李明喜 [編]

日本の公共図書館は、いわゆる「箱モノ」から、コミュニケーションなどを重視した「有機的なモノ」へと変化を遂げ、日常に溶け込むものとなっている。このような変化はいつごろから見られるようになってきたのだろうか？1950年代から、コロナ禍を経た2020年代の現在まで、全国各地にある特色ある公共図書館を紹介し、図書館建築の歴史的な流れを追う。2021年に刊行し、好評を得た『日本の図書館建築』に、新たに18館の図書館を追加収録した、待望の増補改訂版！

ライブラリーぶっくす・A5判並製・448頁・2026年7月刊行
978-4-585-30024-3・定価4620円(税込)

勉誠社
新刊案内
建築史

歌謡と芸態

在原業平の表象

児玉絵里子 [著]

『伊勢物語』『源氏物語』などの物語、そして和歌は、若衆歌舞伎の衣裳や美術にどのように取り入れられたのか。そして、それらは琉球宮廷舞踊にどのような影響を与えたのか。描かれた若衆歌舞伎の絵画や、琉球紅型の衣裳に見える文芸表象とは。人々はそこに何を託し、何を伝えようとしたのか。従来各々の視点から言及されることの多かった「歌謡」——踊歌や詞章と、「芸態」——舞踊の所作・振り・型という、文献研究と身体的考察を、多数の絵画や文献から総合的に行った意欲作! 図版点数100点超!

四六判並製・304頁・2026年1月刊行
978-4-585-37023-9・定価4180円(税込)

宗教のダイナミズム

アジアの地域形成を読み解く

宮坂清 [編]

私たちが生きる「地域」は、常に変化し続けている。その過程に宗教はいかに関与しているのだろうか。受け継がれてきた歴史や民俗、街に点在する神社仏閣や教会、宗教家や政治家の活動、さらにはインターネットを通じた信念や価値観の流通…。これらは相互に結びつきながら、地域の生成、維持、変容に作用してきた。地域を固定的な地理単位としてではなく、人々の日常実践の反復を通じて形づくられる文化的特性＝ローカリティ(「地域性」)概念を手がかりに動的なものとして捉え、地域形成や国家統治、戦争、植民地支配、家族形成といった多様な局面において、宗教が果たしてきた実践的な作用を歴史学・神学・国際政治学・文化人類学など多様な視点から検討する。

アジア遊学316・A5判並製・208頁・2026年3月刊行
978-4-585-32562-8・定価3080円(税込)

勉誠社
新刊案内

民俗学

国策紙芝居からみる 日本の戦争II

神奈川大学非文字資料研究センター
『戦時下国策紙芝居と大衆メディアの研究』班 [編著]

『桃太郎』や『花咲かじいさん』といったなじみのある昔話や民話を改変し、戦争における日本の正統性を子ども達に植え付け、戦意発揚を目的として作成された「国策紙芝居」。1930年代後半から日本教育紙芝居協会を中心に作成され配布された国策紙芝居は、当時、約1000種類作られたといわれ、その全体像はいまだ不明な点が多く残されている。本書は2018年に刊行した『国策紙芝居からみる日本の戦争』未収録の、国内外に保存されている国策紙芝居287点を、あらすじとともに、フルカラーで紹介。紙芝居にかかわった人物の経験に深く潜り込みながら、その思想や意識のありようを描き、また、植民地や戦場、銃後の経験のなかで紙芝居という文化がどのように意識化されたかを考察する論考を収録。国策紙芝居を通して、当時の戦争に対する見方や、日本を取り巻いていた状況を知ることのできる一冊。

A4判並製・480頁・2026年3月刊行
978-4-585-37025-3・定価11000円(税込)

絵画史料を読む

中世・近世の生活文化史

斉藤研一 [著]

疫病が流行した時、人々はどんな行動をとったのか。女性たちは、日々どんな仕事をしていたのか。酒呑絵巻から読み取れることは何か。そして幕末の錦絵に描かれた朝比奈義秀とは。暖簾や看板、酒宴の様子や、人と動物の関わりなど、絵巻物や洛中洛外図に描かれた図像を比較・検討し、共通点や差異、変化を読み解き、その時代を生きた人々の生活の様相、考え方を明らかにする。絵画史料を読むための実践入門書。

四六判上製・352頁・2026年3月刊行
978-4-585-32090-6・定価4620円(税込)

学校図書館サービス論

金沢みどり・雪嶋宏一[監修]金沢みどり・望月道浩[編著]

学校図書館では、児童生徒の読書環境や学習環境を充実させ、居場所を提供するなどのサービスに取り組んでいる。本書では、児童生徒への読書支援、学習支援、情報活用能力の育成、教員への授業支援などに加えて、GIGAスクール構想の実現に伴う公共図書館や博物館などとの連携による学習デジタルコンテンツの利活用など、幅広い視点から新たな学校図書館サービスについて考察する。さらに、各校種の学校司書による優れた実践事例を紹介しながら、今後の学校図書館サービスのあり方についてわかりやすく論じる。

ライブラリー 学校図書館学3・360頁・2025年7月刊行
978-4-585-30403-6・定価2970円(税込)

調べ物に役立つ 図書館のデータベース

2025年版

小曾川真貴[著]

図書館には調べ物に役立つ便利なデータベースが揃っています。でも、「使い方が分からない」「そもそもどういうデータベースがあるの?」といった人もいるのでは? 本書では図書館で使える主要なデータベースと、Webで使える無料のサービスの使用方法を紹介。図書館での蔵書検索や、キーワードを使った検索方法についても、やさしく解説。2022年に刊行し、好評を博したデータベースの使い方の入門的ガイドブックの改訂版。図書館ユーザー、図書館員…、図書館にかかわるすべての方々必読の一冊!

ライブラリーぶっくす・四六判並製・240頁・2025年7月刊行
978-4-585-30016-8・定価2200円(税込)

勉誠社 新刊案内

書誌学・本の本
図書館情報学
アーカイブズ学

新装版 書籍流通史料論 序説

鈴木俊幸[著]

貸本屋や絵草紙屋、小間物屋等の営業文書や蔵書書目・看板・仕入れ印など、書籍流通の実態を伝える諸史料を「眼光表紙裏に徹する」博搜により再構築し、書籍文化史の動態を捉える。

※本書は2012年刊行の『書籍流通史料論 序説』の新装版です。

A5判並製・496頁・2025年10月刊行
978-4-585-32077-7・定価8800円(税込)

チリメン絵

ゴッホを魅了した知られざる出版文化

編集部[編]

「チリメン絵」をご存じだろうか。浮世絵などが印刷された和紙を四方八方より揉んで縮め、織物のちりめんのような質感を出したもので、最近では書物として仕立てられた「チリメン本」のほうが名を知られているかもしれない。「チリメン絵」は「チリメン本」をさかのぼること数十年前に生まれ、はやく海外にも伝わり、なんと、かのゴッホの《タンギー爺さん》にも書き込まれていることが明らかとなった。これら「チリメン絵」はどのように作られ、また、どのように海外の画家やコレクターに愛されるようになったのか。文理の枠組みを超えて、多面的視野からチリメン絵という知られざる東西交流の一コマに初めてメスをいれる画期的特集。

書物学32・B5判並製・120頁・2025年11月刊行
978-4-585-30732-7・定価2200円(税込)

黎明期の活字出版

和装活版本から文学書肆春陽堂の成立

山田俊治[著]

一八八〇年代の日本は、江戸時代以来の整版印刷にかわり、活字を利用した活版印刷が広く展開していく時期であった。活字印刷でありながら和綴りで製本され、時には錦絵の表紙で飾られた和装活版本、俗文学の新たな媒体となったボール表紙本、合冊を前提としたこより綴りの逐次出版物など多様な書型が生み出され、また、法制度の制定、新興業者の参入などが重なり、時代は混沌の様相を呈していた——。この日本出版史における近代移行期に人びとはどのように対応していったのか。共隆社や春陽堂などときに勃興展開した版元の刊行書籍や関連資料を博搜・蒐集し、多角的な読み解きにより活字印刷黎明期の出版文化の有り様を通史的に描き出す意欲作！
掲載図版約三五〇点！

A5判並製・320頁・2025年12月刊行
978-4-585-39051-0・定価6600円(税込)

文化財を未来につなぐ 博物館と学芸員の仕事

学芸員をめざす人へ

高木徳郎[編著]

基礎知識や法制度から、企画・展示、作品の収集や保存・修理、調査研究など多岐にわたる博物館活動の現状と課題、具体的な仕事のノウハウまでを平易に解説。学芸員の実体験やエピソードのほか、地域の文化財を未来につなぐための博物館の活動の実例を豊富に収録し、これからの博物館のあるべき姿や学芸員にとって最も大事なことを学べる入門書。学芸員志望の学生をはじめ、自治体職員として文化財保護や観光・地域振興政策の立案・推進に携わっている人、博物館のファンやサポーターとして博物館を支えている人、博物館のファンやサポーターとして博物館を支えている人に必備の一冊。

A5判並製・352頁・2025年11月刊行
978-4-585-30022-9・定価3080円(税込)

勉誠社 新刊案内

書誌学・本の本
図書館情報学
アーカイブズ学

蔵書家・集書家・書誌学者

蔵書・研究とその時代

編集部[編]

「集書家」・「蔵書家」・「書誌学者」…
本に惹きつけられ、本をこよなく愛した彼らは、どのように書物を集め、どのようなコレクションを形成し、いかに調査したのか。国内・海外のさまざまな人物を取り上げ、書物に魅せられた彼らの、その苦勞や成果、そして知られざる逸話などを広く紹介する。

書物学33・B5判並製・120頁・2025年12月刊行
978-4-585-30733-4・定価2200円(税込)

明治のインテリゲンチア・ 前衛派マスコミ人 鈴木秀三郎遺稿集

鈴木秀三郎[著]鈴木武夫・横山學[編]

社会主義者・住谷悦治らと民本主義者・吉野作造に師事し、プロレタリア文学者・藤森成吉と同じ空気を吸った鈴木秀三郎。現代社会の「前衛」(先端)を多くの雑誌記事で紹介するとともに、古版新聞や雑誌、切支丹遺物の収集にも尽力した秀三郎の著作を集成する。

A5判上製・514頁・2026年3月刊行
978-4-585-32085-2・定価13200円(税込)

学校司書のお仕事

大橋崇行[著] 有山裕美子[監修]

現在、学校司書の配置率は全国で非常に高まってきている。本書ではストーリー形式で学校図書館司書になるためにはどうしたらいいのか、またその仕事の実態、そして学校図書館司書たちが直面している実態をわかりやすく描き出す。様々な専門的な用語について、また、図書館で行われるイベント、個性的なレイアウトなど実際の学校で行われている取り組みなどを取り上げる充実のコラムも多数掲載！

ライブラリーぶっくす・四六判並製・272頁・2026年4月刊行
978-4-585-30023-6・定価1980円(税込)

新装版 貸本問屋と貸本文化

娯楽的書籍の出版・流通・受容

松永瑠成[著]

近世以降、日本国内での書籍の出版点数は年々増加し、それまで読書と縁のなかった層へも、次第に書籍が行き渡るようになっていった。しかし、当時の書籍はまだ高価であり、蔵書として代々引き継がれていくだけの価値を有する学問的な書籍以外、たとえば小説類をはじめとする娯楽的な読み物などを購入して読む人々はそう多くはなかった。そのような娯楽的な書籍の流通を担ったのが貸本屋である。近世から近代に営業をしていた貸本屋の実態、また、貸本屋向けの書籍を出版・蔵版し、それらを卸す機能を有した貸本問屋のあり方を、これまで顧みられることのなかった諸種の資料を駆使し、初めて解明。貸本問屋→貸本屋→読者という娯楽的書籍の出版・流通・受容の総体を明らかにする画期的成果。図書館必備の一冊！

※本書は『貸本問屋と貸本文化』(ISBN978-4-585-32063-0)の新装版です。

A5判並製・672頁・2026年4月刊行
978-4-585-32099-9・定価9350円(税込)

勉誠社 新刊案内

書誌学・本の本
図書館情報学
アーカイブズ学

デジタルアーカイブの 権利処理入門

数藤雅彦[責任編集]

小山紘一・川野智弘・酒井麻千子・鈴木康平[編]

作品や資料を未来に残し、活用するデジタルアーカイブの取り組みは、博物館や図書館、文書館のみならず、学校や企業でも広く行われている。しかし、デジタル化や公開にあたっては、著作権や肖像権、所有権、プライバシーなど様々な権利の「権利処理」が必要になる場合がある。本書は、これらの権利処理の方法を弁護士や実務者、研究者が解説し、現場の悩みを解決する実践的な入門書である。デジタルアーカイブを構築して資料を保存・公開する際の、権利処理にまつわるノウハウをまとめた必携の一冊！

A5判並製・296頁・2026年5月刊行
978-4-585-30025-0・定価3850円(税込)

日本の図書館建築 増補改訂版

プロジェクトから日常へ

五十嵐太郎・李明喜[編]

日本の公共図書館は、いわゆる「箱モノ」から、コミュニケーションなどを重視した「有機的なモノ」へと変化を遂げ、日常に溶け込むものとなっている。このような変化はいつごろから見られるようになってきたのだろうか？1950年代から、コロナ禍を経た2020年代の現在まで、全国各地にある特色ある公共図書館を紹介し、図書館建築の歴史的な流れを追う。2021年に刊行し、好評を得た『日本の図書館建築』に、新たに18館の図書館を追加収録した、待望の増補改訂版！

ライブラリーぶっくす・A5判並製・448頁・2026年7月刊行
978-4-585-30024-3・定価4620円(税込)



〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町2-18-4 徳栄ビル4F
WEBSITE=<https://bensei.jp/> E-mail=info@bensei.jp
TEL=03-5215-9021 FAX=03-5215-9025